

No.41 2014.12

前橋文学館報

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち



萩原朔太郎賞受賞詩人より 第三回 財部鳥子（第六回受賞者）

詩碑、わが知らぬ想い出

萩原朔太郎賞のすばらしいところは受賞者に詩碑を建てて下さることである。

広瀬川のほとりに第六回萩原朔太郎賞受賞者を記念する詩碑、白い美しい少々反身な大きな石に私の詩は刻まれている。詩は受賞詩集『鳥有の人』から「水郷」十九行の最後の四行を刻んで頂いた。

水底を覗くと しずかに

一輪の紅い蓮が浮いてくるところ

舟べりから手を伸ばして

わが知らぬ想い出を折りとった

詩碑のすぐ前を流れる広瀬川に蓮は咲いていないが、ここに私の詩が詩碑として建っていることは「わが知らぬ想い出」としか言いようがない不思議なことだと思った。私は故国を知らぬまま中国大陸で育って、

日本の敗戦後をその異国に生きのびて、父と妹を亡くし、母に連れられて故郷へ帰って来た。そのような自分自身の流浪生活が「わが知らぬ想い出」であると思えたのだ。私は忘れたかったのである。しかしこれは私の想い出なのだと言いたいようがない十九行の詩。いくら言葉を尽くしても詩にはならないものが無いの虚空からやって来たような気がした。

朔太郎の詩のなかに住む夥しい夢幻も、あれは「わが知らぬ想い出」なのではないかと思っている。私の忘れられない詩に『月に吠える』のなかの「およぐひと」があるが、プールや海で水に入るたびに朔太郎の詩句が私のこれからの泳ぐ体験のように思えてしまう。いったい、この泳いでいる人はだれなのだろうか。

およぐひとのからだはななめにのびる、

二本の手はながくそろへてひきのばされる、

およぐひとの心臓はくらげのやうにすきとほる、

およぐひとの瞳はつりがねのひびきをききつつ、

およぐひとのたましひは水のうへの月をみる。

「およぐひと」を詩人は外側からその動作を観察しているようだが、やがて「およぐひと」の内側に入り込んで、瞳や心臓やそのたましひを書き留めている。そうすると、この泳いでいる人はだれだろうか。本人ではないらしい。この人物はこのような言葉の音楽として詩人の脳髓のなかに住んでいる。そういうリアルな手触りがある。

やがて「およぐひと」は貝を呼ぶだろうと私は勝手に思っている。同じ詩集のなかに「貝」という詩があるから。これは六行の詩だけれど無限に広々とした世界を感じさせる。終りの三行を引用しよう。

潮さし行方もしらにながるるものを、

浅瀬をふみてわが呼ばへば、

貝は遠音にこたふ。

ただよう貝を、浅瀬から呼ばずにはいられない人生の根源のさびしさに浮かんだこのイメージは生まれる前の自分に向かつて呼びかけているようでもある。

この人こそあの「およぐひと」ではあるまいか。生の電流体に触れて貝に呼びかける人の正体は詩の核心で

あり、「くらげのようにすぎとほる」心臓なのだから。

私が詩によって最初に受けた賞は円卓賞で出版社の南北社が出していた。第一回目の受賞者は萩原葉子さん(小説)だった。二回目は吉行理恵さんと私の詩がともに頂いた。賞状を授与する人は第一回目の萩原葉子さんだった。それからは葉子さんのダンスの公演にご招待を頂いたり、私の属していた「歷程」のお祭りに出演して頂いたり、不思議なご縁を大切にしていた。しかし、思いかえずと私は葉子さんと朔太郎の話はしたことがない。

財部鳥子(たからべとりこ)

1933年新潟県生まれ。

中国(旧満州)で育つ。敗戦時に父と妹を失い、1946年に日本に引き揚げる。

立原道造の影響を受けて詩を書きはじめ、1965年に第一詩集『わたしが子供だったころ』を刊行。1966年「いつも見る死」で第2回円卓賞を受賞。1984年『西游記』で第9回地球賞、1992年『中庭幻灯片』で第10回現代詩花椿賞を受賞。1998年『烏有の人』によって第6回萩原朔太郎賞受賞。2003年『モノクロ・クロノス』で第18回詩歌文学館賞。その他の詩集に『胡桃を割る人』(2008年)ほか。

中国現代詩の翻訳にも力を注ぎ、訳書に『陳東東短詩集』(1996年)、共訳書に『億万のかがやく太陽』(1988)、『現代中国詩集・チャイナミスト』(1996年)など。ほかに紀行随筆『猫柳祭』(2011年)、小説『天府 冥府』(2005年)など。

日本現代詩人会会長。